

聖書：使徒 12：18～25

説教題：神に栄光を

日時：2013年12月29日

今日の最初の部分は前回の話の続きです。ヘロデ・アグリッパ1世は、12使徒の一人ヤコブを剣で殺し、それがユダヤ人の気に入ったのを見て、次にはペテロをも捕らえました。そして過越の祭りの後に、民の前に引き出して殺そうとしていました。しかしその前夜にペテロは不思議な仕方で助け出されます。主の御使いの先導によって、第一の衛所、第二の衛所、最後の鉄の門と次々に突破して、牢の外に連れ出してもらいました。ペテロは兄弟たちが集まっていた所に行って、事の次第を話して聞かせ、急いで他のところへ出て行きました。そこまでが前回見たところです。

さて、次の日の朝のこと、兵士たちの間に大騒ぎが起こります。あれほど厳重な体制でペテロを見張っていたはずなのに、その彼がいない！いよいよこの日にペテロを処刑し、自らの名声を高めようとヘロデは計画していたのに、肝心のペテロがいない。ヘロデはすぐに捜させるも、彼がどこに行ったのか、全くその足取りをつかむことができません。そこでヘロデ王はどうしたのでしょうか。彼は番兵たちを取り調べ、彼らを処刑するように命じます。実際、当時はこのような習慣があったようです。ヘロデはやり場のない怒りをこのようにぶつけたのでしょう。彼の面目は丸つぶれとなり、彼は苦々しい思いでユダヤの地を後にし、カイザリヤへ下って行ったのです。

さて、ヘロデの話はこれで終わりません。彼にはカイザリヤの地でさらなる悲劇が起こります。詳しい事情は良く分かりませんが、ヘロデ王はツロとシドンの人々に強い敵意を抱いていました。そのためツロとシドンの人々は食糧の供給をストップされていました。この事態を改善するため、ツロとシドンの住民は、侍従ブラストに取り入って、王との和解を求めます。彼らは何とかがして、王のご機嫌を取ろうとして、この機会を求めたのでしょう。そうして定められた日がやって来ます。ヘロデはそこで演説します。そして何とそこで彼は突然死することになるのです。

このヘロデ王の最期については、ヨセフスも「ユダヤ古代誌」という書物の中で書き記しています。それによるとヘロデは王になる以前に投獄されていたことがありました。その際、一人のゲルマン人が近寄って来て、彼にこう言ったそうです。「あなたはもう少しでこの牢屋から出られるでしょう。しかし、あそこに止まっている一羽のフクロウをもう一度目にした時には、その日から5日と生き延びられぬことを知っておきなさい。」ヘロデは間もなく、無事に牢屋から出て、次の代には自らが王座に着きます。そんな彼の最期について、ヨセフスは記しています。「さて、ユダヤ全土を3年間治めた後、アグリッパ王はカイザリヤの町にやって来た。そこで彼は皇帝を崇める催し物を開いた。その祭りには彼の領土の主だった人や、身分の高い人々がおびただしく集まって来た。祭りの二日目に、ヘロデは全部が銀で作られた全く素晴らしい織物の衣装を身にまとい、朝早く劇場に入って来た。すると朝日の光がその銀の衣に当たるにつれて、驚くばかりにキラキラと輝ききらめいた。その輝きは彼を見つめていた人々に恐れを引き起こしたほどのきらめきようであった。やがて、あちこちから、彼にへつらう人々

が叫び声をあげた。―それはヘロデの美德のためではなかったのだが―。そして人々は彼を神と呼んで、言った。『私たちに恵みを垂れてください。これまで私たちはあなたを人として敬って来ましたが、これからはあなたを人間以上の方として認めます。』王はこれを聞いたが、彼らをしかろうともせず、そのへつらいの言葉を退けようとしなかった。ところが間もなく彼が上を見上げると、頭上にある一本のロープに一羽のフクロウが止まっているのを見た。このフクロウはかつては幸運の使者であったが、王は今度はすぐにそれが災いの使者であることを見て取った。王の心は悲痛に刺し貫かれた。それと同時に激しい腹痛が起こり、それは大変猛烈な発作に始まった。そこで彼はすぐに王宮に運ばれた。そして5日間続けざまに腹痛で苦しんで後、死去した。享年54歳。治世第7年のことであった。」

このヨセフスの記録と使徒の働きとの間には異なる点がいくつかあります。たとえばルカはツロとシドンの人々がヘロデと和解する機会としてこの日のことを語っていますが、ヨセフスはローマ皇帝カイザルをたたえるための集会だと言います。またルカでは虫にかまれたことが言及されていますが、ヨセフスでは腹痛だったと言われています。またヨセフスの記事で目立つものとして、ヘロデの運命を告げるフクロウが登場して来ます。これらの違いは、これらが互いに独立の資料であったことを示唆しています。にもかかわらず、これらはかなりの点で驚くほどの一致を見せています。特に注目すべきことは、ヘロデが神としてあがめられたことを退けず、その賛辞を受け入れたことが責められているという点で両者は一致していることです。

私たちはここに、神に栄光を帰さずに、自分に栄光を帰す罪の何と重大なことかを見させられます。ヘロデはなぜさばかれたのでしょうか。それはヤコブを殺したからではありません。12使徒のリーダー・ペテロを捕らえたり、教会を迫害したからではありません。23節に書いているのは、彼が「神に栄光を帰さなかったから」です。

使徒たちはこれとは反対の態度を取っていました。たとえばペテロは使徒の働き3章12節で、美しの門にすわっていた男を癒した時、集まった群衆にこう言いました。「イスラエル人たち。なぜこのことに驚いているのですか。なぜ、私たちが自分の力とか信仰深さとかによって彼を歩かせたかのように、私たちを見つめるのですか。」10章26節で異邦人コルネリオの家に招かれた時、ひれ伏して出迎えたコルネリオに言いました。「お立ちなさい。私もひとりの人間です。」また使徒の働き14章15節でパウロとバルナバが、それぞれゼウスまたヘルメスと呼ばれ、群衆が彼らにいけにえをささげようとした時、パウロは衣を裂いて叫びながら言いました。「皆さん。どうしてこんなことをするのですか。私たちも皆さんと同じ人間です。」

私たちはどうでしょうか。私たちはこのヘロデの姿を見る時、自分と無関係だとは思えません。私たちも本当は神に帰すべき賛美や栄光を、自分の方に奪い取ろうとする傾向を持っていることを思います。人々から「素晴らしいですね」と言われた時、「そんなことはありませんよ」と言いつつ、心の中では「そうでしょう、そうでしょう」と思う。「ちゃんと気付いてくれてありがとう。できればそれを他の人の前でももっと言い広めてね。」などと思う。私たちは聖書を通して、良き賜物はすべて神から来ていることを知っています。パウロが1コリント4章で次のように語っている真理に同意します。「あなたには、何か、もらったものでないものがあるのですか。もしもらったのなら、なぜ、もらっていないかのように誇るのですか。」ところが私たちは、神が賛美されるべきだとしても、私も誉められるべきだと思う。これは私

の功績であり、私が頑張ったからであり、私の能力によることを皆に認めてもらいたい。そのことでたえてもらいたいと思う。

しかしそのようなヘロデの罪は厳しく罰されたことを覚えて、私たちは神に栄光を帰すべきことを益々学ぶように導かれるべきでしょう。そのために私たちは何をするにあたって、まず神により頼むべきです。「主が家を建てるのでなければ、建てる者の働きは空しい。」と詩篇 127 篇にある通り、主が働いてくださらなければ、そこには何の善も生まれません。ですから私たちは事を行なう前にまず主に祈るのです。そして先に祈るだけでなく、事が導かれた後に感謝をささげることも忘れてはなりません。主が可能にしてくださらなかったら、私たちには何一つ良いことはなし得ません。すべての善はただ主が上から恵みを注ぎ、与えてくださったものです。「私たちにではなく、主よ、私たちにではなく、あなたの恵みとまことのために、栄光を、ただあなたの御名にのみ帰してください。」(詩篇 115:1) そのように祈り、感謝をささげる歩みを導かれて行きたいと思えます。

さて今のことは今日の箇所が語る重要なメッセージの一つだと思いますが、今日のメッセージはそれだけではありません。あるいはさらに進んで、今のことがメインポイントではないと言う方が良いかもしれません。この箇所を記したルカは、何を言いたかったのでしょうか。それは最後の 24 節 25 節を見る時に浮かび上がってきます。24 節：「主のみことばは、ますます盛んになり、広まって行った。」この 12 章の最初で教会は弱く見えました。ヤコブは殉教し、ペテロは捕らえられ、ヘロデ王が何でも思いのまま支配しているように見えました。しかしこの章の最後はどうなっているのでしょうか。ここに見るのはヘロデ王の死、そして迫害にもかかわらず、みことばはますます盛んになり、広まって行ったということです。25 節：「任務を果たしたバルナバとサウロは、マルコと呼ばれるヨハネを連れて、エルサレムから帰って来た。」11 章 30 節でエルサレム教会を助けるためにアンテオケ教会から遣わされた二人が再びアンテオケに戻ってきます。そして次回 13 章からパウロの世界伝道旅行のわがが導かれることとなります。いよいよ御言葉は盛んになるのです。そのために用いられるマルコという器も、ここに用意されています。ルカはこうして、私たちは何に信頼すべきかというメッセージを送っているのではないのでしょうか。時に世の力が強く、絶対的に思われることがあります。世の王様や世の人々の方がきらびやかで、華やかで、魅力的であり、そちらの栄光にへつらう生き方が得策ではないかと思われる状況があります。しかし世の栄光は一時的なものでしかない。教会を迫害し、自らの力を誇っても、それはいつまでもは続かない。神がそれを許してはおかれない。この章の結末を良く見よ！とルカは語っているのではないのでしょうか。ヘロデは虫にかまれて息絶え、主の御言葉はますます盛んになり、これからさらに大きなみわがが展開される。ですから私たちはどんな状況にあっても、心乱されることなく、真の主権者に信頼して、みことばのための歩み、御国のための働きに専心すれば良いのです。

ある人は、ここでみことばがますます盛んになったと記されるのは良いが、ヤコブは死んだのではないか。福音が広まっても、そのために一生懸命に仕えた人が死んでしまうようでは祝福と言えるのだろうかと思うかもしれません。しかし今日は詳しく繰り返しませんが、ヤコブはこの殉教によって何も失ってはいません。確かになぜ彼がここで死ななければならなかったのか、生きていればもっと大きな働きができたのではないかと人間的には思えます。しかしこれ

は神のみに秘められた御心に属することです。定められた地上の生涯を全うしたヤコブは、神の御前で何の損失も受けていないのです。むしろ尊い働きのために立派に仕えた者として、豊かに天で報われることを私たちは疑わないのです。

2013 年最後の聖日礼拝のこの日は、神にすべての栄光を帰すべきことを心に留めるにふさわしい日です。この一年も私たちが信仰の歩みを歩み通すことができたのは、ただ神のあわれみゆえです。迷いやすく、すぐあらぬ方向に走ろうとする私たちが、この年の終わる時もこの神を礼拝する場にいることは、神の一方的な恵みです。そんな私たちにこの一年に、もし少しでも喜びや感謝することがあったなら—いや良く考えればそれは少しではなく、たくさんあったと思いますが—そしてさらに神の御国のために仕え、少しでも用いていただくことができたなら、それはただただ神の恵みによることです。私たちはその一つ一つを思い起こして、良きことのすべてについて神に栄光を帰したいと思います。そして新年も、真の主権を持つ神に信頼して歩みたい。私たちの日々の生活には困難があるかもしれません。世の力の方が強く見えるかもしれません。自分たちは小さく、無力な者のように思うかもしれません。しかし主は私たちの見えるところを越えて、ご自身の計画を成し遂げられるお方です。人間の偽りの栄光をひっくり返して、ご自身の栄光の御国を拡げ、実現されるお方です。私たちはこの主にすべての信頼を置いて、益々御言葉が広まり、御国が建てられることのために祈り、仕え、用いていただく幸いに歩んで行きたいと思います。